

□補足資料 質疑応答

1. 油注ぎは、信じたときに1回限りでなされる聖霊の働きとして学びましたが、このことに関して質問です。詩篇23篇5節では、主が信者の頭に油を注いでくださると言われています。信じてからも油注ぎがあるように見えますが、いかがでしょうか？

(回答)

まず、詩篇23篇1節から3節を見てみましょう。

1～3節 主は私の羊飼い。私は乏しいことはありません。主は私を緑の牧場に伏させ、
いこいのみぎわに伴われます。主は私のたましいを生き返らせ、御名のゆえに、私を
義の道に導かれます。

ダビデは、主を「私の羊飼い」と呼び、自分をその牧場の羊にたとえています。
そして、自分には乏しいことがない、主は私を緑の牧場に伏させ、いこいの水際に連れて
行ってくださると、主への信頼を歌っています。

次は4節から5節です。質問のところは二重下線部で示します。

4～5節 たとえ 死の陰の谷を歩むとしても私はわざわいを恐れません。あなたが
ともにおられますから。あなたのむちとあなたの杖、それが私の慰めです。
私の敵をよそに、あなたは私の前に食卓を整え、頭に香油を注いでくださいます。私
の杯はあふれています。

二重下線部は、人が信者になるとき、あるいは信者が霊的に成長するときの聖霊の働
きについて語る箇所ではありません。当時の宴会のときの習慣と関係します。家の主人
は客を迎えるために食卓を整えます。招いていた客が到着すると、席に案内する前に客
の頭に香油を注いで歓迎します。そして席に着いた客の杯にぶどう酒をなみなみと注
ぎます。「私」はダビデ、家の主人「あなた」は、「主」です。

波線部、「私の敵をよそに」とあります。まわりに敵が囲んでいたとしても、主はダ
ビデを守り、豊かな食事の席を設けてくださるという、主を信頼する歌です。

このダビデの賛歌は、預言でもあります。主がダビデを客として招いて催す宴会とは、
メシアの王国の建国を祝う大宴会です。その宴会の前に、ダビデは復活して、約束の地
に立つでしょう。そして、メシアの王国でイスラエルの王となります（エゼキエル38：
23～24）

2. 油注ぎに関連しての質問です。ゼカリヤ書 4 章に「金の燭台とその左右にある二本のオリーブの木の預言」があります。そこには「**油を注ぎ出す**」(4:12)という働きがあります。それと聖霊の働きである「油注ぎ」とは関係があるのでしょうか？

(回答)

ゼカリヤ書 4 章 11～14 節の「二本のオリーブの木」は、確かに聖霊の働きと関係しますが、人が信者になるときの聖霊の働き「油注ぎ」とは関係ありません。

二本のオリーブの木は、「二人の油注がれた者」(ゼカ 4:14)と呼ばれる二人の預言者を指します。ここでの聖霊の働きは、預言者に神のことばを授ける「啓示」の働きです。この二人の預言者は、将来、大患難期のエルサレムに現れます(黙示録 11:3～6)

3. 油注ぎにより、私たち信者は祭司となると教えられました。それに関連して質問です。35 ページ、I ペテロ 2:5、「**神に喜ばれる霊のいけにえをイエス・キリストを通して捧げる、聖なる祭司となります**」とありますが、「**霊のいけにえ**」とは、どのようなもののでしょうか？ ヘブル 13:15「**賛美のいけにえ**」でしょうか？

(回答)

霊的ないけにえ、あるいは霊的なささげ物とは何か、ペテロのこの手紙の中では、具体的に記されていませんが、新約聖書の他の箇所からは、次の 6 つがあげられます。

「信者自身のからだ」(ロマ 12:1～2)、「賛美」(ヘブ 13:15)、「自分自身」(エペソ 5:1～2)「殉教」(ピリピ 2:17)、「善を行うこと」(ヘブル 13:16)、「兄弟姉妹の間で物を分かち合うこと、神の奉仕者への贈り物」(ヘブル 13:16、ピリピ 4:18)

ペテロの手紙第一の文脈では、「善を行うこと」がもっとも近いと思われます。

2 章 11 節から 3 章にかけて、メシアの律法が詳細に書かれているからです。

日常生活での心得(2:11～12)、政府との関係(2:13～17)、奴隷の立場にある信者に対して主人との関係について(2:18～25)、夫婦関係(3:1～7)、信者同士の関係(3:8)、悪口を言われたり侮辱されたりしたときの対応原則(3:9)、信仰生活の目標「いのちを愛し、幸せな日々を見る」(3:10～12)

メシアの律法に従わず罪を犯したと気づいたときは、罪を言い表す祈りをしましょう(Iヨハ 1:9)。この祈りこそ、まさに罪をきよめていただくための霊的ないけにえと言えましょう。 参照 詩 51:17 神へのいけにえは 砕かれた霊。打たれ 砕かれた心。神よ あなたはそれを蔑まれません。